

道徳心理学者および教育者としての天職（その二）

——L・コールバーグ——

アン・ヒギンズ

宗 中正訳

去る四月に行なわれたローレンス・コールバーグの追悼会において、ロバート・セルマン教授が、ちょうど今クラーク・パワー氏の話にあった時期である一九六〇年代後半のラリーの業績と生活について回顧して下さいました。セルマン氏はこの時期におけるラリーの生活について彼自身の視点から話して下さいました。「ラリーが桁外れに生産的であった絶頂期に彼と知的活動を共にできたことは本当に幸運だった。当時彼は、若い世代の研究者たちに新しい考え方を植えつけ始めていた。（中略）彼は一九六八年、『発達と連続性——社会化への認知的発達の理論的アプローチ』と名づけた『社会化理論とその研究に関するハンドブック』のための長い理論的な章をちょうど書き終えたところであった。私は、学位取得後の最初の年、この章を何度も繰り返し読んで読むことにほとんど時間を費やした。その著書はすべての心理学の分野にとってではないとしても、直ちに発達心理学の真の古典となるものであった。私は読むごとにこの新天地を開拓するような作品の底の深さや、この思想の新しい意味を見出し続けた。今日でさえも、児童発達研究協会の前会長であり、この協会の一九八五年の大会においてラリーに特別賞を贈る際の責任者であったエレノア・マコービーは、この章を読み返すたびにいつもなにか新たな素晴らしいことを学んだと語っている。」

「ラリーは、生きていれば今後も多くの種を蒔き続けたことだろう。彼は本当に飛び抜けた知力だけでなく、英知に恵まれた人物だったから。ラリーは（英知への探究の中で）身につけた力をやすやすと本に著していった。ラリーの英知のもう一つ特に素晴らしい点は、それが人々を一つに結びつけたいという欲求から生まれた英知であり、又愛されたいという自らの欲求によって育かれた英知であったということである。ラリーが我々の内に種を蒔いた思想や理想がここまでこれたのは、ラリー・コールバークの精神が寛容で開かれていたことによるものだ。彼は実際、状況によっては我々の人生全体をさえ喜びで満たしてくれる、意味に対するセンスを我々に与えてくれたのである」

オーガスト・ブレイジ教授は四月、セント・ルイスのワシントン大学で行った追悼スピーチの中で、ラリー・コールバークは「一つの考えに集中した人であり、その人格化された考えと自分を一体化した」と述べています。彼は、ラリーとその人生を「ある考えが強度に人格化されたものである」と性格づけました。もちろんそれだけではないでしょうが、確かにそのとおりでと思います。ブレイジは、ラリーの業績におけるピアジェの影響について触れています。「しかしまたコールバークの業績を、よくいわれるように道徳に関するピアジェの業績の単なる延長だとするのは誤りである。彼の道徳性の発達に関する業績はほとんど彼自身のものだ。自分の仮定を立て、洞察を加え、そして何にもまして彼は自分の心理学的な業績を持つ哲学的、人道的、道徳的意味を非常に明快に理解している。ここに彼のとりつかれたような献身の根本がある。ピアジェに関しては同じようには言えない。」そしてブレイジは次のように締めくくっています。「しかし、ここにラリーの人生から学ぶべき教訓がある。善や美の探究と同様、真実の探究は、幸福の追究と同じようにある個人の人生にとって確実なゴールとなるであろう。そのために幸福自体を犠牲にしなければならないとしても。」

私は、今日、ラリーの人生が重要な人間的真理——人生における道徳上の真理——の探究であったというブレイジの考えと、その真理の探究におけるラリーの英知に関するセルマンの認識、この両方について更に詳しく述べたいと思います。

ラリー・コールバークは、一九七二年に腸の寄生虫病にかかり、体も弱って、残りの人生をその病気と共に過ごすことになりました。一九七九年には、彼は情緒的な衰弱に一時苦しみました。ラリーはそれまでに多くの論文を発表し、彼の業績の中心とも言える仕事を進めていました。新しい世代の心理学者や哲学者、その他の研究者を励まし、教育し始めていたのです。そして彼は、学校や刑務所における道徳教育の実践にあたり、諸問題に取り組んでいました。彼が自分の業績の要約を本として出版することの必要性を感じたのはその後のことです。アン・コルビーとの共著である、道徳性の段階についての主要な著作、『道徳的判断の測定(The Measurement of Moral Judgement)』[Cambridge University Press, 一九八七]の出版にむけて努力する一方で、彼は、哲学、心理学、教育に焦点を当てたハーバー・アンド・ロウ出版社からの三冊本の構想を練っていました。彼はその第二巻までを完成していたのです。教育についての巻は執筆しませんでした。彼の教育についての思想は彼の死後出版された本、『児童心理学と児童教育』(Child Psychology and Childhood Education) [Longman Publishing Co., 一九八七]そしてまもなくコロンビア大学出版からクラーク・パワー氏と私の共著で出版される予定の、『道徳教育、正義、共同体——三つの民主的学校の研究』(Moral Education, Justice and Community: A Study of Three

Democratic Schools) に盛り込まれています。当初のハーバー・アンド・ロウ・シリーズとは違いますが、第三巻としての本が、『ライフサイクルを通じての倫理的発達段階』(*Ethical Stages through Life Cycle*) という題で一八八八年に出版される予定です。ここでは、一生を通しての異なった発達段階の人々から自然に出された哲学的な疑問について検討しています。これがラリーが書いた最後の本でした。

これらの本を、ラリーが彼の人生を形成していた基本的な真理や主要な関心事をできる限り完全に他の人々と分かち合おうとした、意識的な努力であると見てよいと私は信じています。もう一度ブレイジの追悼スピーチを引用しましょう。人間の道徳性に対するラリーの最初の洞察に関する彼の説明は素晴らしいものです。「心理学的な視点からみて、ラリー・コールバークの貢献とその遺産は、次の三つの基本的な概念とその組織だった不屈の追究にある。その三つとは、構造主義の概念、適切さの序列の確立順序の概念、そして、普遍主義の概念である。」

「人間の、すべての人間の道徳的な概念と信念は、砂上の石のように、切り離して取得、保存することはできないとコールバークは信じていた。彼は、道徳的な考えかたはむしろ認知的に組織されていると考えた。その考え方は、人間や世界について、また何が正しくて何が間違っているかについて、さらには正しいとか間違いであるとかは一体何を意味すべきかについて、彼のより基本的な理解を反映している。」ブレイジは続けます。「私はこの考えを見出した時に感じたことを今でも覚えている。心理学は、我々一人一人がずっと考えてきたこと、つまり道徳の問題が我々にとって有意義であり、これが結局、道徳的に重要であるということを実際に認めつつある。」

「コールバークの第二の基本的な主張は、我々の道徳哲学は比較可能であるというものである。その理由は、人々の道徳哲学はすべて正義に関する哲学だからというだけではなく、もっと基本的にすべて同じ発達順序に従って位置づけられるからである。そしてまた、後に発達した道徳哲学は、前のものに比べて、認知的にも道徳的にもより良いものであると言えるからである。」

「コールバーク理論のこの第二の点には非常に大きな意味がある。哲学に関して道徳的な適切さの序列が存在しさえすれば、道徳教育の介在が理性的に正当と認められ、徹底した社会批判が可能になる。」

「第三の考え——道徳の普遍主義についての考え——への歩みは、小さくはあるが重要な歩みである。道徳的な疑問の普遍性、いくつかの人類の体験や社会構造の普遍性、そしていくつかの人類の推移過程と目標の普遍性によって、すべて人間は、性、人種、宗教、文化の別なく——すべての人が最終的に同じ道徳哲学には到達しないであろうが——道徳的理解においては同じ順序を踏むであろう、という仮説を立てることができる。」

ブレイジによるラリーの業績の中心である三つの考えの描写に基づいて、私は彼の人生の中心であり、業績に反映していると思われる考えをここに紹介したいと思います。最初の考えは、道徳的相対主義についての考えです。これはラリーが哲学的には弁護できないものとして、しかし慣習的な道徳的推論から慣習以後の道徳的推論への発達論的移行期には適切であり、恐らく必要でさえあるものとして提示した概念です。相対主義の問題とその哲学的な解決策は、一九七一年に書かれた「存在から当為へ」(*From Is to Ought*) に述べられています。相対主義に対する発達論的な解決策は第五段階への移行ですが、これは、ラリーの初めての縦断的研究の被験者に

一部表われた退行の問題に直面した時、理論ならびに発達段階の測定の再定義を伴うことになりました。「児童期と成人の発達における連続性と非連続性」〔Continuities and Discontinuities of Childhood and Adult Development〕一九六九、一九七三、一九八四」という題の三つの続きものの論文で、ラリーは彼の縦断的研究の被験者に対して再インタビューを行った結果を受け、人間性の発達に関する心理学的理論における相対主義の位置について多くの問題を取り上げ、それに答えていきました。近く出版される彼の本、『ライフサイクルを通じての倫理的段階』(Ethical Stages through the Life Cycle)の中で、ラリーは、初期における慣習性からの移行においてと同じように、第五段階から第六段階への移行における相対主義の問題に、私たちがなぜ、またどのように直面し、それを克服しなければならないのかという問いを立て、それに暫定的な解答を与えています。彼は著作の中でしばしば、相対主義によって提示される究極的な問い、つまり、彼の道徳性段階理論によつては解答が与えられていない、なぜ道徳的であるべきなのか、という問いを発しています。彼は、最後の「連続性と非連続性」に関する論文の中で、次のように語っています。すなわち、「前にも述べたように、よくある懐疑的な疑問に対して有効な普遍的・倫理的原理について明確な自覚に到達した後には、全く不条理な世界において、我々はなぜ公明正大でなければならぬのか、という最大の懐疑的疑問が残る。もちろんそれは、過渡的な相対主義や懐疑主義の段階では答えることのできない問題の一つと考えられている。社会的な契約を基盤とする第五段階ではこれに答えているが、妥協的な解答であり、それは自分自身の幸福を社会的に、つまり他人の権利や幸福を十分配慮しつつ追求しなければならないという解答である。第六段階の倫理的な原理はこの価値の相対性の問題について第五段階に比べてより完全な解答を提供しているが、なぜ道徳的であるべきなのかという問いに対しての解決はかつて不完全なものとなっている。ここには、倫理的原理と利己主義的、快楽主義的関心との間に社会契約と快楽主義の間に見られたものよりも著しい対立がある」と述べています。ラリーは、なぜ道徳的であるべきかというこの問いに対して答えを集めていきましたが、彼は、この問題は結局なぜ生きるのか、どう死に対するのかという問いに結びつくものだといつも言っていました。

ラリーは、自分は実際の人間だと述べていました。そして、世界に対して実際に価値ある方法で貢献したいと願い、実践的な問題、あるいは現実の問題に深い関心を持っていました。理論的には、ラリーはこの自分の関心を判断し行為の問題として設定していました。彼は、この問題は相対主義的アプローチないしはいわゆる価値中立的アプローチでは理解できないと主張しました。行為の道徳性は外部からの、あるいは客観的な視点からだけでは判断できません。それは必然的に主観的な視点、つまり行為を行う者の視点からも判断しなければなりません。しかしながら、彼は一九八四年に出した著作で次のように述べています。「これは、行為が単にそれを行う本人が道徳的だと信じるから道徳的であるという意味ではない。むしろ我々は、その行為を導いた推論を考慮することなしには道徳的な行動を説明することは不可能であるという立場をとっている。」(一五五頁)

このことが哲学的に正しい理由を説明した後でも、そこで一息入れようとはせず、ラリーは心理学者として、道徳的判断と道徳的行動の関係における一貫性の理解に、またより多くの場合には矛盾の理解に真の説得性を与えてくれる他の心理学的・状況的あるいは社会学的な変数を熱心に探し求めました。ラリーは、調査活動や、刑務所および学校での研究を通してこの調査を実践的に行いました。判断と行為の一貫性の問題についてのラリーの研究は、彼の性格の基本的な側面を表していました。これは、彼の生涯の友人であるジェイコブ・ゲヴィルツ

教授が、他の人、他のすべての人に対するラーリーの「変わらぬ親しみやすさ」、彼のたぐいまれな心の広さと忍耐強さと呼んだものであり、またブレイジが、ラーリーの献身、つまり「一つの考えに集中する心」と呼んだものでもあります。

ラーリーは心理学者、哲学者、教育者として相対主義やその対極にある教化に対して力強く論争を行いました。彼は人間の発達、そして社会生活の発達を促進することを主張し、道徳的推論と道徳的行動の普遍的な特色を承認しよう主張したのです。彼は、一九八四年に次のように述べています。「道徳的判断において原理的段階に到達しているということは、認知的にただその「原理を理解することではない。それは、(A)その原理は現実社会では実際には行なわれていないという事実にもかかわらず、その理想は適切であると理解すること、(B)これらの理想に献身するための基礎を理解すること、そして、(C)同時に、自分がそこで首尾一貫してそれらの理想を實行していく場所である現実社会に対する献身を理解することである。」ラーリーの開かれた心と変わらぬ親しみやすさは、判断・行為問題の答えが見つかるならどこへでも探していくという彼の態度を示しています。彼は自分の理論的な考察に、自我の力、ないしは意志という人格変数、個人の責任と自治の観念、道徳的感情、そして発達する道徳的な自己という認識を持ち込みました。しかしながら彼は、人格の他の側面を考えるために発達論的なパラダイムを徹底的に究明する試みには非常に厳格でした。人格の他の側面の一例は道徳的類型となった副次的段階の概念である他律と自律です。あまり知られていない例としては彼の情緒に関する見解があります。ラーリーは情緒を、認知と同様に組織だった構造として性格づけました。彼は述べています。「実際、認知と情緒との区別は抽象的なものにすぎない。すべての情緒は多少とも世界や自己の知覚を含むものである。これらの知覚が発達と

共に変化するにつれて、情緒も変化する。道徳的思考が発達した児童期においては、怒りは道徳的義憤となり、もう少し上の年齢においては、罪への恐れは罪悪感となる。恐れと罪悪感の質的な違いは「認知的なもの」、あるいは「構造的なもの」である。情緒が構造的な構成要素を持つということは、情緒の発達が認知的発達に還元できるとか内容上の発達論的变化は構造の変化に還元できるといったことではない。ここで言っているのは、我々は二つの理論——認知の発達理論と情緒の発達理論——を持つことはできない、ということである。(児童心理学と児童教育、三二—三三頁)

ラーリーは、多くの人々が彼の理論を、道徳的信条を無視しているばかりでなく情緒の側面をも無視していること気づいていました。ラーリーが人々の道徳的価値の内容について真剣に取り組んでいたことは、彼の教育についての著作にみられる「隠れたカリキュラム」や学校の道徳的雰囲気改善方法、擁護者としての教師などについての記述においても明らかです。彼は、自分の理論の枠組みの中に、社会規範、特殊な状況における束縛やストレス、道徳的なディレンマに直面している人々の排他的あるいは個人的な人間関係の状況などについての認識を持ち込みました。彼は自分が専念していた考えに、つまり道徳的な生活の全体を理解するための研究にすべてのものを含めて考えましたが、このやり方は一部の批判者には理解できないものでしたし、怒り出す人もいました。

ラーリーは実践的な人で、実際の道徳問題を真剣に考えていましたから、彼は情緒の問題も含めて考えました。しかし彼は、彼の、個人的道徳的判断の発達理論が人間全体、あるいは人間の社会生活全体を説明できるとは決

して思いも意図もしていませんでした。彼の学校での努力——道徳的ディレンマ討論や、新しいカリキュラム、公正な共同体をつくり出すための努力——は、人々が道徳的葛藤に直面し、解決し、自ら下した道徳的な決断に従って行動していく中で、人々の相互の関係を理解し、変えていく努力でした。それらは、彼が、社会構造、決定を下す過程と方法、そして教師と教わる側との力と権威の関係を变えていくために必要だと考えた努力でした。道徳的な人生を理解するための研究において、ラリーは、道徳的に感受性の高い子供を育てる場合に両親が使う普通の方法としての教化の限界を明らかにし、学校における道徳教育の方法としては教化が不当であることを明らかにしました。彼は一歩進んで、私たちのほとんどが同意すると思われる価値の教化は効果がなく、同時に「隠れたカリキュラム」を生み出すという点では有害でさえあることを示しました。生徒の価値教育に成果を示す良い教師は——普通自分がそうしているとは気づいていないのですが——生徒が競争的に他人を無視すること、カンニングすること、そして不誠実になることも教えているのです。

ラリーの『ライフサイクルを通じての倫理的段階』という間もなく出版される本の、教師への提案を示す章で彼は次のように述べています。「教師は生徒にカンニングをしないように期待するが、地方新聞への投書からの次の引用には、アメリカの郊外の裕福な高校から来た生徒が感じた、学校の競争的雰囲気に対する印象が描かれている。『僕たちの一番の問題は誰も幸せじゃないということです。立派な受験校であることにプライドを持つことが、地獄のような雰囲気を生みだしているんです。良い成績を取るためにみんながしていることは信じられないものです。僕が見たところでは、生徒の九五パーセントは、必要ならいつでも罪悪感なしにカンニングするでしょう。この習慣は彼らが学校から教わったものです。』この生徒の投書から我々は、学校の隠れたカリキュラムが非常に種々雑多な道徳的メッセージを生徒に与え、彼らを二重の拘束に巻き込んでいることを知ることができた。確かにこの隠れたカリキュラムは直接カンニングが正しいと教えたわけではない。しかしそれは、生き残るためには、特に他の人も同じことをしている場合には、時にはカンニングも必要だということを教えているのである。このように、この隠れたカリキュラムは生徒の道徳的な感受性を麻痺させるので、彼らは『罪悪感なしにカンニングする』ようになる。そして驚くほど低年令の生徒が二組の価値があることを知るようになる。一つは自分の理想を形成する価値であり、もう一つは『現実の世界』でそれを実践するためのものである。」(二三頁)

ラリーにとって教化の問題と価値の相対性は、学校の現実世界の中で常に結びついています。彼は、道徳教育に対する発達論的アプローチはこれらの問題に対する部分的な解決に過ぎず、学校の道徳的雰囲気高めめること、又生徒と教師が共に自分の理想、正しいことや間違ったこと、善や悪など、道徳性の理解に基づいて首尾一貫した行動ができるような環境を作り出すことについては未解決のままだと訴えました。

ラリーは、道徳教育の問題は心理学の理論だけでは解決できないもので、真の解決は教師と生徒、そして彼自身のような人々の一致団結した努力によってなされることを知っていました。つまりこれらの人は、隠されたものや破壊的なものを明らかにし、共同して教育の理論と実践を打ち立てることができなければなりません。又この場合の教育の理論と実践は、それぞれの視点から道徳教育の内容あるいは実質、並びに教育方法の重要性に対する十分な認識に基づいて、確実なものであると認められたものでなければなりません。彼は道徳教育の実践と理論は幅広いものでなければならぬと考えましたが、それはまた普遍的な原理を基盤にしていなければならぬ

いと主張しました。彼は次のように述べています。「道徳教育の基盤を一定の神学に置く必要はないが、すべての神学が共有している一つの道徳原理がある。ユダヤ人の預言者、イエス、ブツダ、そして孔子は同様に黄金律を説いた。自分を他人の立場においてみなさい、というこの黄金律は道徳の共感的基礎である。黄金律はまた正義でもある。正義は、公正さ、平等、そして人と人との相互性である。すべての文化とすべての宗教は、道徳の基盤を共感と正義、つまり黄金律に置いている。我々のそれぞれの道徳段階は、道徳的普遍性の理解の次元から階層化されたものである。」『児童心理学と児童教育』（四三頁）

ラーリーは実践的だけでなく非常に理性的な人でした。一九七〇年代の初頭から中盤にかけて、彼は道徳的判断の発達理論で明らかにした段階を越えた道徳と倫理の問題を考え、それを書き著し始めました。彼は、この宗教的・存在論的な問題に関する業績を、形而上学的な「第七段階」と呼びました。彼がケープ・コッドの別荘でほとんど毎夏書き続けたこれらの著作の中で、彼は「最大の懐疑的問い」と名づけた、全く不条理な世界において我々はなぜ公明正大でなければならないのか、という問いに対する合理的な解答を模索しました。この問いはラーリーにとって、なぜ生きるのか、どう死に対するかという問いを含むものでした。今振り返ってみると、ラーリーの創造的才能や英知、そしてある程度は彼が苦しんだ病いが人間のライフサイクルの段階を進ませたこと、また彼が自分自身、なぜ生きるのか、そしてどう死に対するかという問いに、彼のライフサイクルが完了した五九歳までに答えを出したことは事実であると思われまます。最後に私は彼の著作から、そして未刊のメモから幾つか拾い読みすることで、ラーリーの個人的な人生哲学を皆さんと分かち合おうと思います。彼は人生において、これらの大きな問いに対する有意義な解決策は非二元論的な多様性を持った冥想的体験を含んでいるという見解に立っていました。つまりその冥想体験とは、本質的に、自己が全生命の一部であるという感覚を持ち、スピノザが「精神と自然界全体との融合統一性の発見」と名づけた宇宙的展望を体得するということでした。

彼の著作、『道徳性の発達の哲学』の中で、ラーリーは、マルクス・アウレリウスを「第七段階」の例として挙げていますが、彼はラーリーが個人的にその信条に共鳴していた偉大な人物です。ラーリーはマルクス・アウレリウスとストア主義を次のように描いています。「マルクス・アウレリウスの信念の内容は他のすべてのストア主義者の信念と同様、簡潔で厳しいものである。それは、宇宙は法則的で、認識可能であり、さらに進化するものだという信仰から始まる。マルクス・アウレリウスは宇宙の究極的、合法的で進化する原理を引き合いに出して神を自然から切り離そうとはしない。彼は時にその原理を神と呼び、又時に自然と呼ぶ。この信仰から彼は、不条理な世界にありながら普遍的な正義の原理に従って行動する力を自己に与える道徳の自然法的な見方を導き出した。それは又、無限の全体の中の限りある一部分として自己を感じることから生じる安心を彼に与える。」

彼はマルクス・アウレリウスを引用しています。「限りある生命があなたに与えることのできる最高のものは、正義と真理である。つまりそれは、あなたの行為が理性の法則と一致している時の心の平安である。あなたの運命はあなたが支配できるものではない。偶然の奇行でさえも自然界の図式に組み込まれている。あなた自身が宇宙の一部なのだ。世界の本質とは何か、あなた自身の本質は何なのか、そしてあなたの本質がとつともなく広大な全体のほんの小さなひとかけらに過ぎない、ということをいつも想いおこさない。その時あなたは、あなたがその部分である自然に対して一つ一つの言葉と行為を一致させることはだれにも妨げられないことを知るであ

ろう。」

「科学的な自己理解としての徳——フロイトの視点とスピノザの理想」(Virtue as Scientific Self-Understanding: Freud's View and Spinoza's Vision) というタイトルのついた論文のための昨年(2007年)のメモに、ラリーは次のように書いています。「スピノザによると、三つの主要な否定的、あるいは心の痛む感情——憎悪、抑圧、不安——を感じるまでには四つの段階があるという。最初は、心の痛む感情は辛いものであり、それが辛いものである限り道徳的妥当性はないというはつきりした認識である。うらやみ、恨み、罪悪感、義憤は、たとえそれらが自分や他人に対する苦痛の源泉であっても、慣習的倫理によって妥当なものとして保証される。これらの感情の扱いにおいて、スピノザは、奥の深い、又妥協しない快樂主義者であり、ベンサムやミルあるいはB・F・スキナーよりも厳しかった。苦痛を自分や他人に与えることは、より強い苦痛を防ぐため以外には倫理的に認めなかった。道徳においては、苦痛を生む感情はその慣習的道徳を守る役割に関わらず認められていない。」

「痛みのある、消極的な感情に打ち克つ第二段階は、その原因を知的に理解し、これらの感情の本能的、条件的原因に対する洞察を得ることである。これはフロイト派の精神分析学の中心的な内容である。第三に、スピノザはこの感情の理解を自分自身の感情だけでなく、他人の感情にまで広げて考えた。他人の愛や憎悪はためらめなものではなく、因果関係的に決定されていることが理解されれば、その反応として憎悪や痛みの感情を起こさずにする。そして、我々が複雑な感情を持つ相手を意識的に愛する努力をすれば、愛が結局は憎悪に打ち克つであろう。」

「人間の自由と幸福への第四の、そして最も重要な段階は、最も愛する価値のあるもの、あるいは愛の最も不変的な原因となるもの、つまり生命、宇宙、神あるいは自然を愛することである。我々が愛する人は死ぬかもしれないし、我々のもとを去り、我々を憎んで苦痛を与えるかもしれない。もし我々が体験する移ろい易い喜びの原因の本質的な源である神、自然、あるいは生命そのものを愛するならば、我々の愛は永遠の満足の源を見い出すであろう。」

これらはラリーの「第七段階」に関する思想の一部ですが、第六段階に存在する倫理的原理と利己主義的、快樂主義的関心とを明確に区別することによって提示された、厳格な相対主義に対する彼の暫定的な解答です。ラリーは言っています。「道徳的自律を含め、人間の自律、あるいは自由というものは、自然や我々自身についての知的理解に基づくものであり、自由意志に基づくものではない。スピノザの決定論でさえ、深く理解されていれば、ある種の道徳的自由を我々にもたらすのである。」